

○風あげとモンスーン

8月のコロombo市内、インド洋に面した広場を訪れると、空一面に舞う無数の風に目を奪われる。「風あげ」といえば日本ではお正月の風物詩だが、コロomboでは南西モンスーンが吹き込むこの時期こそが最も適した季節である。

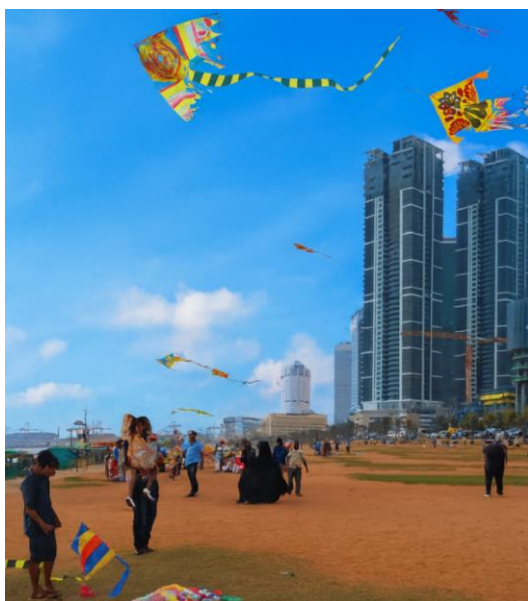


図1 大空を舞う無数の風

○花開いた貯水灌漑文明

モンスーンはスリランカの気候を大きく左右する。乾期と雨期が明確に分かれ、国土の4分の3を占める「ドライゾーン」では、年間約1100ミリの降雨のほとんどが雨期（10月～翌年2・3月）に集中する。そのため、乾期における農耕は天水だけでは成り立たず、古代から水を貯え効率よく利用するための灌漑システムが高度に発達してきた。北部を中心とするスリランカには、大小合わせて1万を超える貯水池が点在する。その多くはアヌラダプラ王国時代（前4世紀～11世紀）に築かれ、今なお田畑を潤している。

この貯水灌漑システムの特徴は、複数の貯水池を連結したネットワークと、ソロウワと呼ばれる

石造の暗渠式排水施設にある。ソロウワは巨大貯水池から安全に取水できる画期的な装置であり、決壊のリスクを避けながら水を供給することを可能にした。しかし、スリランカでは、ソロウワはこれまで十分な研究対象とされてこなかった。多くは劣化が進み、盗掘や貯水池の修繕工事の影響で半壊・全壊したものも少なくない。さらに現在も国策で修繕工事が進んでおり、考古学的な基礎資料が失われてしまう危険性は依然として高い。こうした背景から、私は2017年より現地に出向き、ソロウワなどの水利遺構の記録調査を続けている。



図2 遺跡調査中の筆者

○高専人文系研究者としての挑戦

勤務先である高専は高度な技術者を養成するための5年間一貫教育の高等教育機関である。専門学科以外の教養系科目を担当する教員は卒研生を持たない。そのため、スリランカ調査は基本的に単独で行わざるを得ない。予算も日程も人手も限られる中で、私がたどり着いたのが「SfM写真測

量」であった。市販のカメラで対象物を多方向から撮影し、その写真群から三次元モデルを生成するこの技術は、低コストかつ効率的である。現地に必要なのは写真撮影のみであり、短期間でも数多くの遺構を調査できる。得られた 3D モデルを用いて堤体の石積み工法やソロウワの構造を比較すれば、築造技術の変遷を実証的に解き明かすことができる。まさに私にとってうってつけの方法だった。



図3 現在も機能しているソロウワ

○傷だらけの遺跡探査

調査の道のりは順調とはいかない。ポロンナルワ県のブフ貯水池での失敗談は、今でも学生に話す格好の教材だ。

炎天下、自転車で遺跡を目指す途中、小さな雑貨屋で休憩した際、半裸の老人に出会った。英語が通じず、身振り手振りで道を尋ねても要領を得ない。諦めて自転車にまたがりペダルをこぎ始めると、さっきの老人が大声で手を振ってくれていた。私は手を振ってそれに応え、右側のあぜ道へと進んでいった。その後、遺跡付近とおぼしき場所にたどり着き、有刺鉄線のような鋭いトゲを持つ低木の密生地帯をさまようこと、約 2 時間。お目当ての水利遺構にたどり着いた頃には、体中擦り傷だらけのありさまだった。取水口側の写真を撮り終え、一息つこうと堤体の頂上部に広がる木陰に腰掛けようとしたその時! 私は愕然とした。堤体の反対側には錆びだらけではあるものの「遺

跡はこちら」と書かれた看板と、整備された小道が広がっていた。

ふと思い返してみると、あの時の老人は、別れ際に手を振っていたわけではなく、右の間違った方へ進もうとしていた私に、「そっちじゃない! 左だ! 左!」と必死に呼び掛けてくれていたのだろう。それに対し、私はのんきに笑顔で手を振り返っていたのだ。スリランカは英語が通じるから何とかなるだろう、という自身の認識の甘さを痛感するとともに、現地語習得の大切さを改めて感じた出来事だった。

こうした現地での体験は、高専での日々の授業の中でも学生に語っている。とりわけ、自分自身の失敗談は学生たちの心に響くようだ。将来、日本だけでなく世界での活躍が期待されている彼らが海外に出るとき、異文化理解の必要性や言語を学ぶ大切さを思い出してくれればと願っている。



図4 密林の中で野宿しながら調査することも



図5 三食カレーが続くことも